

「言葉」を考える

—かれらのための言葉を、かれらのもとにおく—



【始動】 万石浦中学校避難所の子どもたちの修学旅行が、具体的に始動し始めました。土曜と日曜の両日にかけて、家庭訪問をしながら、保護者に要項を渡し、了解を求めました。どこの親御さんも、提案をよろこんで受け入れてくださいましたが、一方では、「あんなにやんちゃなのに、親がついて行かなくても本当にいいのですか？言うこと、ほんとうに聞きませんよ。」と心配顔。「大丈夫です、まかせて下さい…」と、こちらもちよっと心配な気持ちは持ちながらも、胸をたたいてお引き受けしました。避難所に残っている子どもたちも少なくなっ、みんな参加してくれるか心配でした。実際、先週までは、子どもたちに修学旅行の話をして、「行くかわからない…」といった反応が多く、参加人数が少なくなってしまうのではないかと考えていました。しかし、今回、保護者の方にお話しをしてみると、「子どもから話は聞いています。行きたいと家ではずっと言っていたんですよ」という家庭がほとんどでした。震災以後、子どもたちもいろいろなことを我慢したり、お金のことを心配したりと、自己規制を働かせていたのかもしれませんが。本当に無料でいけるのか、どこか信じられなかったのかもしれませんが。親の反応がわからずに、「行きたい！」と私たちには素直に伝えられなかったのでしょうか。現在の参加希望は、子どもたち12人、おばあちゃん2人です。

「行ける！」と決まってからの子どもたちは、修学旅行に対してとても積極的になりました。日曜日には、大学生が準備した白紙の紙が綴じられた手作りの「しおり」に、自分で考えて持ち物を記入したり、表紙を書いたり、日程を書き込んだりしました。中には、当日持っていく旅行ケースにもう荷物を詰め込んで、「これでいいの？見て！」と教室まで持ってきた女の子もいました。



前回DSでひとめした男の子は、この二日間とても落ち着いて、私たちが持ち込んだパソコンで、新幹線の時間と乗り換えを細かく調べてくれました。それはまるで、“ツアーコンダクターのよう！” 黒板にその結果を細かく書いてくれて、ほかの子どもたちはそれをしっかりと写していました。旅行業者に「丸投げ」していた支援者は、あわてて業者に電話を入れ、休みでつながらなくとも、留守電に電車を指定したい旨を録音しました。今までとは逆に、支援者がちょと煽られてしまう立場になってしまいました。



学年は小2から中1まで。年齢の幅も大きいし、そもそも集団で行動するのが苦手そうな子どもたち。何が起きるのかは全くの未知数。「修学旅行」よりも、引率する大人にとっては「冒険旅行」の言葉の方がぴったりかもしれません。でも、修学旅行に向かって始動し始めた子どもたちを止めることはできません。7月末、万石浦避難所「ライオン隊」は富士山を目指します。

【地震と作文】 東日本大震災からもう4ヶ月が過ぎようとしています、子どもたちの口からも、津波の様子が語られるようになってきました。今回の万石浦日曜支援の最中にも、パソコンで動画を検索して、それを見ながら、「一波よりも二波の方が遙かに大きかったんだよ。一階が流されたのはその時で、ぼくは2階にいてそれを見ていたんだ」といった話しをしていていました。そんなことがあった直後の10時半頃に大きな揺れにおそわれました。東北沖、M7.8の地震でした。

とても暑かったので、子どもたちの熱中症を心配して、飲み物と氷の買い出しに、私は2人の子どもとイオンへ行ってました。レジ袋に品物を詰めているとき、「本を見てくる」と言って、さっきからどこかへ姿を消していた男の子が、血相を変えて走って戻ってきました。「地震だよ、これ、大きいよ！」。食品売り場につるさされている案内板も、一斉に大きく揺れていました。お客さん達も、緊張した面持ちで、周囲を見回していました。「震度5ぐらいだよ。余震が来るかもしれない。津波も来るかも…」と男の子が矢継ぎ早につぶやきました。

教室に戻ってみると、そこもちょっとした騒ぎになっていました。中学校の放送が、「津波注意報が発令された」ことを伝えていたと教えてくれました。子どもたちは集まって、インターネットで震源地や津波注意報が出ている地域などを調べていました。そうした子どもたちの表情から、地震や津波に対する不安や恐怖の深さを、かいま見ることになりました。それは、大人とか子どもとか関係なく、実際に3月11日を体験したものだけが理解できるものなのでしょう。すこし津波について話せるようになって、その体験が整理され、乗り越えられたわけではありません。

私たちが使わせてもらっている中学校の教室の壁に、1枚の「作文募集」の案内が貼られています。ある新聞社が主催するものようですが、それは津波の体験を作文にして応募してくれたら1万円をくれる、というものです。津波ですべてが流されて、お小遣いももらえないだろうから、その1万円で何でも買えるよ…と言った趣旨の言葉が、子ども達に向けて書かれています。

そういえば、モビリア避難所でも似たようなことを経験しました。それは、陸前高田の支援が始まったばかりの4月半ばです。小学生向けの月刊誌で有名な出版社の女性が、小さなスケッチブックを子どもたちに配りに訪れていました。「このスケッチブックに、津波の時の絵を描いて欲しい。本に載せる、載せないはこっちで決めるけど、来週取りに来るからよろしくね」と言って去っていったそうです。(余談ですが、子どもたちの中には、そのスケッチブックにウン〇の絵を描いた子もいました)

子どもたちの奥深く傷になっている経験を、利益のために早くから奪い取ろうとするこうした企業のやり方に、怒りを禁じ得ません。

子どもたちの心の壁にへばりついてはがれない、恐怖に満ちた記憶を照らし出す、新しい言葉を子どもたちは必要としています。しかし残念ながら、その言葉は与えられる

ものではなく、子どもたち自らが獲得するほかないものです。私たちにできることは、やがて生まれるであろう言葉の種を、そっと子どもたちに埋めていってあげることなのではないでしょうか。長い時を経て、芽が出ることを祈りながら…。

【すたんどばいみーによる子ども支援】 毎週末にモビリアで子ども支援活動が続いている「すたんどばいみー」のここ何回かの活動には「迷い」「戸惑い」が見られるようになっていきます。それは、避難所が閉鎖された後、遊びや勉強の活動に参加する子どもの構成が変わったこと、もう一つは、この活動がモビリアの子ども達に何を残すことになるのか、という「問い」に、すたんどばいみーのスタッフたちが到達したことからくるように見えます。

「お兄ちゃんが津波で死んじゃったけど、僕はどうすればいいだろう」。すたんどばいみーの活動は、避難所で聞き取ったこの子どもの言葉がスタートでした。しかし4ヶ月の時を経て、この子は修繕した自宅に戻り、週末は野球の練習に出ることが多くなり、週末のモビリアでの活動にあまり来なくなりました。彼の言葉を聞き取ったスタッフは、あまり会えなくなっても、その言葉が胸にいつも引っかかっていたようです。

今回の支援のスタートとなる土曜日の午前中は、小友小学校の運動会でした。いつも集まってくる子どもたちは、今日は学校です。そこで、すたんどばいみースタッフは、運動会の見学に出かけ、帰り際には今まで関わった子ども達のすべてに声をかけ、午後の活動に誘っていました。その後、集合時間になり、姿を見せない子どもは迎えに行き、とにかく「今まで関わった子ども達を皆集める」という意志が見えます。集まったのは保育園児から中学生まで総勢 20 名ほど、そこで始まったのは、3 グループに分かれての聞き取りで、人数が多いために、決して落ち着いた雰囲気ではありませんでしたが、それでも、スタッフの声がけに応答した子どもの言葉が、模造紙に書かれていきました。

そこに並んだのは「3月11日」に関わる言葉でした。あの日に何が起きて、そこから何がどのように変わったのか。スタッフによると、言葉の数はそれぞれ違いますが、想像以上に子ども達は話をしてくれたそうです。

そのような活動が行われた夜のことで、スタッフは子ども達から「カブトムシ狩り」に誘われたと行って暗闇を出かけていきました。初めての夜の活動(?)です。午後の聞き取りの活動が終わってから、子どもが少し甘えてくるようになったと言います。学校や家では、ほとんど震災の日のことは話題にならないと語った子どももいて、だからこそ、言葉にしてみたかったのかも知れません。ただ、言葉にしてみたけれど、それが本当に良かったのかどうか分からない、そんな不安から言葉を聞いてくれた人と何となくもっと一緒にいたくなかった、そんな感じなのではないでしょうか？

子ども達から今出てくる言葉を、同じ経験をした者達の中に、今置いておくこと。整理を促すのではなく、そのための言葉をみんなの間に置いていくこと。これが、今回すたんどばいみーの始めた活動のようです。今後の展開はまだまだ模索中のようで、夜の反省会は3時間にも及んでいました。その様子を傍らで見ながら、これが、兄を亡くした弟の言葉を聞いたことに対する、かれらなりの責任の取り方なのかもしれない、ということでした。言葉を、誰に搾取されるのではなく、自分達の力に。すたんどばいみーの

活動が、子ども達に何を残すことになるのかという「問い」への、かれらなりの一つの答えとなるのでしょうか？模索はまだまだ続きそうです。

【次回の支援の予定】 7月12日現在

■ 7月16日(土)～7月19日(火)の第16回支援(5部隊構成)

土曜日午前：小友・広田中の支援物資運搬

終日：モビリア仮設住宅の子ども学習支援(すたんどばいみー)

終日：学校図書データ入力支援(図書業者(山十、担当：金野さん)依頼)

午後：万石浦中学校避難所子ども支援

日曜日午前：モビリア仮設住宅の子ども学習支援(すたんどばいみー)

終日：学校図書データ入力支援(図書業者(山十、担当：金野さん)依頼)

終日：万石浦中学避難所子ども支援

月曜日終日：学校図書仕分け支援(図書業者(山十、担当：金野さん)依頼)

火曜日終日：学校図書配本支援(図書業者(山十、担当：金野さん)依頼)

※ボランティアの応募があり、学校図書作業が実行可能となりました。

【協力に感謝!!】

■ 今回の支援隊のメンバー(16人) 柿本隆夫(引地台中学校)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水睦美(東京理科大学)、荻谷夏子、金子尚弘、反町一樹(茅ヶ崎保健福祉事務所)、畠山崇(大和市農政課)、石川和友(大和市国際化協会)、武内敏子(Ed.ベンチャー活動代表)、荒瀬裕士(千葉商科大学学生)

すたんどばいみー：宮脇英理・西岡歩・伊藤瑞姫、東京理科大グループ：甘利悠貴・谷口友梨(東京理科大学学生)、山本遼(東京大学院生)

■ 活動内容 ①小友中学校 支援物資の提供：薬品庫

②広田中学校 支援物資の提供：理科教材(購入分)

③気仙中学校 支援物資の提供：学校使用消耗品(購入分)

④モビリア仮設住宅 支援物資の提供：センターハウス使用消耗品(購入分)
すたんどばいみーによる子ども支援(土・日)

⑤教材業者支援：山十(担当 金野さん)業者支援の相談、三上教材への支払

⑥万石浦中学校避難所 子ども支援(土・日)

■ ご協力いただいたみなさま(敬称略、順不同、物資・寄付を含む) 7/2～7/7

大和小学校、権田和子(元中学校教諭)、櫻井千夏(歯科衛生士)、工藤美知子(大和中学校)、内田良(名古屋大学)

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Ed.ベンチャーヒガシニホンダイシサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

